

トピックス

¹ 大学生における「仕事」の持つ意味

京都学園大学 経済経営学部講師 三 保 紀 裕

1. はじめに

大学生にとって「仕事」とは、2つの点において学生生活に大きな影響を及ぼすものであるといつてよいだろう。それは(1)就職、すなわち自分が将来就くであろう「仕事」、(2)アルバイトとしての「仕事」、の2点である。これらは大学での勉強に対して、それぞれ異なる形で影響を及ぼしている。前者については就職活動やそれにに向けた準備が正課外の時間を中心として多く展開されており、具体的な活動が本格化する時期には、授業よりも就職活動の方が優先されている状況にある。このような状況は就職活動のスケジュールにも大きな影響を与えており、日本経済団体連合会は「新規卒者の採用・選考に関する倫理憲章」において、2015年度は広報活動の開始を3年生の3月1日以降に、選考活動の開始を4年生の8月1日以降とした。しかし、2016年度の選考活動については開始時期を4年生の6月1日以降に変更するとの発表がなされ、学業との両立という点で大きな混乱が起きている。後者のアルバイトについては、時間的なバランスとの問題から、学業との両立を困難なものにするとの指摘が多くなされてきた(例えば、武内、2005など)。アルバイトに従事する理由には単なる小遣い稼ぎだ

けではなく、家計上の問題による所も多い。共通しているのはアルバイトに割く時間が増えることによって学業に割く時間が減ってしまうという点であり、このことが学業遂行を阻害するものとして捉えられてきたわけである。

学業との関係では「時間」という点から両立の難しさが問題視されているが、大学生にとっての「仕事」は学生生活、そして自らの将来に関わるものとして重要な意味を持つことは周知の事実である。この「仕事」という点について、大学生たちはどのような意識を持っているのだろうか。本稿ではこの点について、大学生を対象とした調査における自由記述データの分析を中心として、探索的な検討を行ってみることにする。

2. 大学生にとっての「仕事」と「学業」

ここで、大学生における「仕事」と「学業」の関係について改めて整理しておきたい。両者の関係については、Super (1980)やSuper, Savickas, & Super (1996)を基礎としたキャリア理論からこれを説明することができる。これに従えば、キャリアは「複数の役割に関する意思決定の連鎖を通じて個人に形成されるもの」として定義することができる(菊池、2008 (p.14))。「仕事」と「学業」

1 本研究は平成26年度京都学園大学奨励研究助成を受けて実施されたものの一部である。

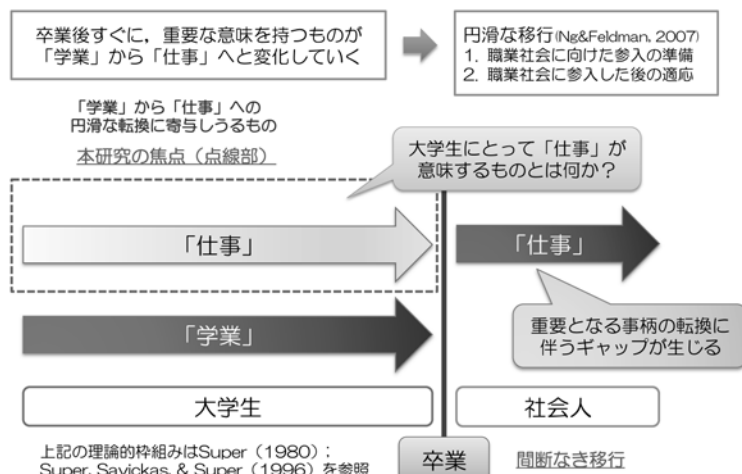


図1 大学生における「仕事」と「学業」の関係性

の関係について、三保・青木・福井・清水(2014)はSuperの理論に基づいた概念的な整理を行っている。それに基づけば、大学生にとって最も重要な意味を持つのは「学業」であり、実際に多くの時間を大学での授業を中心とした「学業」に割いている。日本の場合、大学卒業と就職の間にブランクが無い状態であるのが一般的である。そのため、大学卒業後すぐに重要な意味を持つものが「学業」から「仕事」へとシフトすることになる。ここで問題となっているのは、「学業」と「仕事」との間で求められている事柄におけるギャップである。キャリア教育は極端な言い方をすれば、このギャップを埋めるものとして位置づけることができ、就職活動は「仕事」へ向けた参入の具体的準備として捉えることができる。日本における大学生の就職活動は仕組み上、大学在学中に活動を行っていくことになる。そのため、大学生における「仕事」の意味する所には、将来の職業が含まれることになる。一方で、大学生の多くは在学中にアルバイトにも従事することになるが、これもまた「仕事」として認識されるものとなる。

このような「仕事」に時間を割くことによって、学業遂行が阻害される可能性がある点については前述した通りである。これらの関係性を図式化したものを図1に示す。

3. 「仕事」が意味するもの

大学生における「仕事」と「学業」の関係について、三保ら(2014)はSuperのキャリア理論に基づき、「労働者」と「学生」の2つの役割に対する重要性という視点からこれを捉える試みを行っている。具体的には「労働者」としての役割を「仕事」、 「学生」としての役割を「大学での学び」とした上で、これらに対する「関与」と「参加」の程度について尋ねる尺度(役割意識尺度)を構成している。ところが、ここでは「仕事について深く関与していきたい」「仕事について多くの時間を割いている」といった形での回答を求めているため、「仕事」が意味するものがどのような内容であるかについてまでは明らかにすることができていない。この点について、三保(2015)は役割意識尺度による測定に加

え、ここで捉えている「仕事」の意味について、自由記述による回答から明らかにしようと試みている。本稿では、「仕事」という点について大学生がどのような意識を持っているのかという問いに対して、三保（2015）における成果の一部として、自由記述データを中心とした分析結果を紹介したい。

分析対象としたデータは、2014年10月に実施した調査データの一部である。全国の大学生1～4年生を対象とした調査を実施した。インターネット調査サービス（株式会社マクロミルの「QuickMill」）を介し、1024名から回答を得た。人数は各学年256名（男女各128名）であった。自由記述による回答は役割意識尺度の測定と連動しており、「先の質問において、あなたは「仕事」をどのようなものとイメージして回答しましたか？」と尋ねている。ここでは、この自由記述による回答結果をKJ法により分類してみることにする。

KJ法による分類結果 1024件の回答結果を分類したところ、15の小分類、6の中分類、

そして4の大分類に分類することができた。表1は分類結果を整理したものである。4つの大分類は『将来の仕事（就職）』『働くことの意味』『（バイト含む）仕事』『その他』に分類することができた。これらを順にみていくことにする。まず、『将来の仕事（就職）』は2つの中分類（「将来の仕事」「接続意識」と5つの小分類（「具体的職種」「将来の仕事」「長く働く」「接続」「大学生活」）によって構成されるものであった。多くの項目が小分類における「将来の仕事」に分類されており、そこで回答されている内容のほとんどが「将来就職する仕事」「就職したい仕事」など、卒業後の就職を意識した内容になっていることが分かる。その他の内容は具体的な職種や、現在学んでいる内容が卒業後の就職に繋がっていることを示す項目によって構成されていた。総じて、この大分類では将来の仕事、卒業後の（正社員としての）就職を意識した上での回答がなされていることが示された。

『働くことの意味』は1つの中分類（「職業の3要素」と3つの小分類（「自己実現」「社

表1 自由記述のKJ法による分類結果

大分類	中分類	小分類	人数	計
将来の仕事（就職）	将来の仕事	具体的職種	32	694
		将来の仕事	616	
		長く働く	15	
	接続意識	接続	20	
		大学生活	11	
働くことの意味	職業の3要素	自己実現	45	144
		社会的役割	26	
		生計の維持	73	
（バイト含む）仕事	（バイト含む）仕事	バイト	80	106
		両方（現在と将来）	26	
その他	否定的	義務感	18	80
		否定的イメージ	24	
	その他	その他	8	
		特になし	20	
		分からない	10	

会的役割」「生計の維持」)によって構成されていた。ここで示された回答内容は、「お金を得る手段」「自分のスキルを上げるもの」「責任持って遂行するもの」など、いずれも仕事に対する個人の考え方、捉え方が反映されたものであった。3つの小分類は、尾高(1941)が示す職業の3要素に合致するものであり、将来就く仕事、卒業後の就職といった視点とは異なり、働くことそのものに対する意味づけを考えた上での回答をしていることが明らかとなった。『(バイト含む)仕事』は、1つの中分類(「(バイト含む)仕事」と2つの小分類(「バイト」「両方(現在と将来)」)によって構成されていた。「仕事」の意味するものとしてアルバイト、あるいはアルバイトと将来就く仕事の両方が想起された回答であった。最後に、『その他』では2つの中分類(「否定的」「その他」と5つの小分類(「義務感」「否定的イメージ」「その他」「特になし」「分からない」)によって構成されていた。ここでの回答は、仕事をやらなければならないものとして義務的に捉えているものや、否定的に捉えているもの、あるいは特になしという形で、仕事に関してイメージするものが無いといった内容が中心であった。

これらの回答傾向における割合をみると、『将来の仕事(就職)』では全体の約68%、『働くことの意味』は約14%、『(バイト含む)仕事』は約10%、そして『その他』は約8%となった。このことから、多くの者は「仕事」として将来の仕事を視野に入れていることが分かる。「仕事」として現在従事しているアルバイトやイメージするものが無い者は少なく、大学生の時期は現在や過去よりも「将来」が重要な意味を持つ時期であるとする尾崎(2001)の指摘とも合致する結果が得られた。

分類結果からみた役割意識の違い このような「仕事」の捉え方の違いは、学生生活にも大きな影響を及ぼすと考えられる。この点について、ここでは役割意識を対象に、KJ法による分類を独立変数、役割意識の下位尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。なお、役割意識の下位尺度得点については、下位尺度を構成する項目得点の総和を項目数で割ったものを分析に使用した。

分析の結果、全ての下位尺度において有意差がみられた。Tukey法による多重比較の結果、『学生「関与」』『学生「参加」』『労働者「関与」』の3尺度では群間による得点の違いを確認することができた(表2)。『学生「関与」』では、『将来の仕事(就職)』、『働くことの意味』>『働くことの意味』、『(バイト含む)仕事』>『(バイト含む)仕事』、『その他』という結果が得られた。『学生「参加」』では、『将来の仕事(就職)』>『その他』、そして『労働者「関与」』では、『将来の仕事(就職)』、『働くことの意味』、『(バイト含む)仕事』>『その他』という結果がみられた。総じて、群間による有意差がみられた下位尺度では『将来の仕事(就職)』群の値が高く、『その他』群の値が低い結果であった。

下位尺度得点の傾向をみてみると、『学生「関与」』や『労働者「関与」』といった、特定の役割に対して積極的に関わっていきいたいという思い入れの程度を示す「関与」に關係する得点の方が高かった。特定の役割に対する時間やエネルギーをかけている程度を示す「参加」の方が、全般的にみて「関与」よりも得点が低い傾向にあった。

4. 大学生における「仕事」の持つ意味

本稿の分析で明らかにすることができたの

表2 KJ法による分類結果別にみた役割意識の違い

		将来の仕事 (就職)	働くことの 意味	(バイト含む) 仕事	その他	分散分析結果
学生 「関与」	平均	3.06	2.92	2.84	2.62	$F(3,1020)=14.03(p<.01)$
	SD	0.64	0.67	0.66	0.71	就職, 意味>意味, バイト>バイト その他
学生 「参加」	平均	2.79	2.78	2.63	2.58	$F(3,1020)=3.55(p<.05)$
	SD	0.70	0.68	0.65	0.75	就職>その他
労働者 「関与」	平均	3.13	2.99	3.01	2.66	$F(3,1020)=15.05(p<.01)$
	SD	0.61	0.66	0.58	0.71	就職, 意味, バイト>その他
労働者 「参加」	平均	2.44	2.60	2.60	2.36	$F(3,1020)=4.10(p<.05)$
	SD	0.70	0.67	0.65	0.69	

注:「就職」=将来の仕事(就職),「意味」=働くことの意味,「バイト」=(バイト含む)仕事,の略

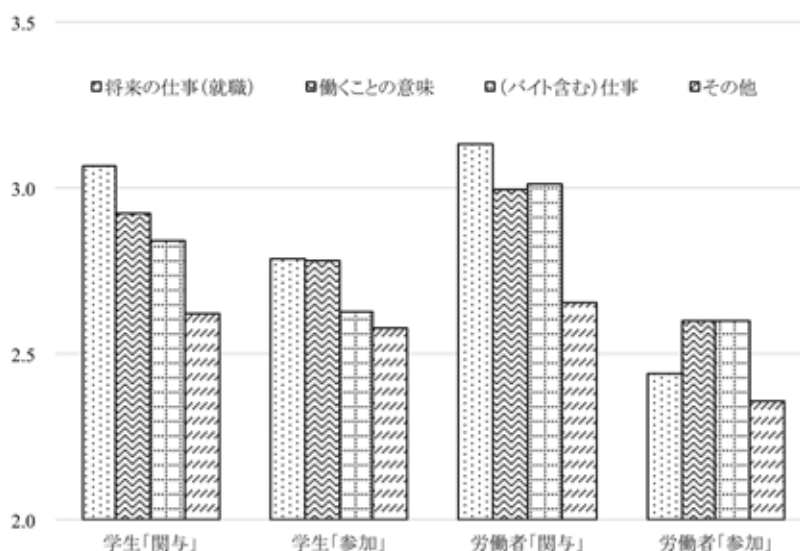


図2 役割意識尺度の比較(分類結果別(大分類))

は、大学生における「仕事」が意味するものの多様性であった。KJ法による分類結果からも分かるように、多くの大学生は「仕事」として将来の就職、自分が将来就くであろう仕事を意識していた。大学生の関心事として、就職がいかに大きな意味を持っているかを読み取ることができよう。一方で割合は低いが、現在従事しているアルバイトを意識した学生の姿も捉えることができた。「1. はじめに」で述べたように、「仕事」が意味するものと

して(1)就職、すなわち自分が将来就くであろう「仕事」、(2)アルバイトとしての「仕事」、の2点をデータからも示すことができたといえる。この他にも、「働く」ということそのものの本質を考えている学生や、「仕事」としてイメージするものが無い学生の姿を捉えることができた点が特徴的であった。

これらの捉え方は学生生活に大きな影響を及ぼすものであると考えられ、その一端を役割意識の違いからみることができた。図2か

らも分かるように、KJ法による分類（大分類）によって大きな傾向の違いがみられた。『将来の仕事（就職）』群では学生と労働者の2つの役割に対する関心が強く、学生としての役割に対しては一定の参加をしていると回答していた。しかし、労働者としての役割に対してはあまり参加をしていないようであった。ここで意識される「仕事」は将来の就職に関係する内容であるため、労働者としての役割に対する参加の程度が低いのは当然の結果であるといえる。将来の就職を意識しながら学生生活に従事している姿を想像することができよう。将来の就職と大学での学びとの接続性を強く意識している学生達であると捉えることもできるかもしれない。一方で、『（バイト含む）仕事』群では労働者としての役割に対する関与は高いが、学生としての役割に対する関与、参加の程度はあまり高くなかった。働くことへの高い関心はあるが、大学での学びに対する関心は低いという点を鑑みると、大学での学びよりもアルバイト重視、あるいは大学での学びとアルバイトの両立を図ろうとしている学生達と考えることができるのではないだろうか。このようななか、異彩を放っていたのが『その他』群に該当する学生達であった。役割意識尺度のいずれの得点も中央値である2.5程度からそれ以下の低い数値を示していた。無目的で無気力な学生であると捉えることができるかもしれない。「仕事」が意味するものとして特にイメージするものが無かったことから、彼らの無目的な様子を伺い知ることができるだろう。

本稿では大学生における「仕事」の持つ意味について探索的な検討を行った。Ng & Feldman (2007) が示しているように、学校から職業への円滑な移行の為には、職業社会への参入に向けた準備と職業社会への参入後

における適応の2点が重要となる。具体的な教育・支援のあり方について論じるのは他の機会とするが、リアルな学生の姿を教育の最前線やデータ等、複数の視点から捉えた上で円滑な移行に向けた教育・支援のあり方を検討することが重要であろう。

5. 引用文献

- 菊池武烈 (2008) . キャリア教育とは何か日本キャリア教育学会 (編) (2008) . キャリア教育概説 (pp. 12-17) 東洋館出版社
- 三保紀裕・青木貴寛・福井未来・清水和秋 (2014) . 大学生のキャリア発達における2つの役割—MTMMによる「関与」と「参加」に関連する学生の役割と労働者の役割のモデル化— 京都学園大学経済学部論集, 24 (1) , 65-82.
- 三保紀裕 (2015) . 大学生における「学生」と「労働者」の役割について 平成26年度京都学園大学奨励研究成果報告書 (未公刊)
- Ng, T. W. H., & Feldman, D. C. (2007) . The school-to-work transition: A role identity perspective. *Journal of Vocational Behavior*, 71, 114-134.
- 尾高邦雄 (1941) . 職業社会学 岩波書店
- 尾崎仁美 (2001) . 大学生の将来の見通しと適応との関連 溝上慎一 (編) 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— (pp. 167-198) ナカニシヤ出版
- Super, D. E. (1980) . A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16, 282-296.

- Super, D. E., Savickas, M. L., & Super, C. M. (1996) . The life-span approach to careers. In D. Brown, L. Brooks & Associates (Eds.) Career choice and development (3rd ed., pp.121-178) , San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- 武内 清 (2005) . 学修と生活のバランス IDE, 473, 13-17.